

分科会より

1) ふれあい自然体験活動(小学校班)

開催日時 平成13年11月2日 金曜日 15時40分~18時

会場 教育学部301号室

助言者 有限会社小野印刷 斉藤千文

弘前第二中学校 相馬撰郎

学生 駒形恭子 佐生尚子 佐藤琴美 藤田かおり 松山幸子 鎌田麻里 弥延浩史

中野綾子 宮木ゆかり

(1) 司会者あいさつ 弥延浩史

(2) ビデオ鑑賞

(3) 討論

司会：学生側で前もって話し合っ出された内容を討論したいと思います。その他にもビデオを見て気づいたことや意見などがあつたら、発表してください。

弥延：ビデオで最後にコールをやっているところがあつたが、あそこまで長時間やっても良かったのか？保護者の方が迎えに来ている中で、時間の問題等もあるし、もっとまわりを見て行けば良かったと思う。

鎌田：私は、個人的におじいちゃんにいつ終わるのかと怒られました。私が時間をおしていることをみんなに言えば良かった。

中野：初めは、子どもたちもまじってコールをかけていたのですが、その後、高校生と大学生がやる形になり、自分の班の子どもたちとの別れが中途半端になってしまったのが残念だった。

弥延：コールをやって盛り上がること事態は悪いことではないと思うが、私も自分の班の子どもたちときちんと別れができなかったことは、後悔した。

司会：相馬先生や斉藤チーフにお聞きしますが、大学生がついた班と1班のようにつかなかった班の子どもたちの反応に違いはありましたか？

斎藤：あまり違いは見られなかった。子どもたちの心の中にはもしかしたら高校生だけっていう気持ちはあつたかもしれないが、高校生が離れたときには指導員が一番若い佐藤さんが入ってくれたから、そのへんの対応はできていたと思う。逆に言うと、みんなから見てはどうだった？

司会：1班が一番近かつた2班さんどうでしたか？

駒形：全然変わりなく。

司会：特に大学生がいるところも、いないところも変わりなかったということですかね。

斎藤：大学生がいないから大変かなとか、かわいそうかなというのは、見ているこちら側の気持ちであつて、子どもたちにとってはそれほど問題ではなかつたのかもしれないね。

司会：次に班の子ども的人数が多く感じたということで、スタッフを増やすことや、班あたりの子どもの人数を変えられないかという問題に関して、何か気づいたことや、感じたこと等があつたら意見を出してください。

宮木：9班と10班は高校生ひとりが2班を見ていたが、ご飯のとき等は、2つの班がそろうのにずれが生じ、食べ始めるのが遅くなってしまった。それよりは、自分ひとりで班全部を見たほうが楽だと思つたので、スタッフを増やすことには反対だ。

中野：私は9班担当だったが、高校生リーダーがご飯のときに10班のほうに座つてしまうと、子どもたちが自分達のリーダーを10班にとられたみたいに思い、残念があつていた。実際、高校生リーダーがいてくれないと、やはり戸惑いはあつたと思うが、スタッフを増やしてしまうと、子どもたちが戸惑ってしまう可能性がある。

弥延：私は8班だったけれど、7・8班は高校生リーダー1人だった。7班に関してはわからないけれど、うちの班に関しては、食事のときなど行き来していたが、特にそれに関しての不平、不満はなかった。やはり高校生は、今までずっと子ども会に関わってきているし、今年初めて参加した私達とは違うから、助言をしてもらえるところが良かった。1班あたりの人数は子ども会で決めることだけど、少し多いと思った。高学年の子どもたちだから大丈夫だろうとは思ったが、これが、高校生リーダーと一緒になかったら大変だっただろう。基本的な生活習慣を見ても、忘れ物が多かったり、走り回ったりしていたから、それで1班あたりの人数を減らしたほうが良いと思った。

佐生：私の班は、高校生と私2人で班を見ていたから、子どもの人数に関しては、そんなにいいとは感じなかった。高校生リーダーがいないときは私が見て、食事のときも特に困ったことはなかった。他の班は、2つの班に高校生リーダーが1人できつかったのかもしれないが、私の班は結局、1人で5人を見る形だったので、そこまで感じなかった。

弥延：さっき、1つの班の人数を減らしたほうが良いと言ったけど、実際に自分達が教師になってクラスを受け持ったら、多ければ40人いるわけで、先生としての子どもたちとの関わり方とは違うと思うけど、基本的な多くの子どもを見る目は養えたかな。実習に行っても子供たちはたくさんいるわけだし、その点では良かったと思う。

司会：他に、「スタンプの意見がまとまらなかった」とか、「寝るときを班ごとにできなかったか」という意見がでています。

中野：私の班の子で、班のメンバーとは仲良く話せても、寝るとき一緒だった人とはなかなか馴染めなかった子がいた。やはり、班ごとだったら、もう少し楽しく過ごせたのではないか。

司会：寝るとき班ごとにしなかったのは、何か意図があったのですか？

斎藤：これは、施設の問題なのだ。この部屋には何人寝せなさいということが決まっていて、いわゆる人数操作をしなくてはいけない状況になるのだ。

相馬：班ごとが本当は一番良いのだ。だけど、例えばこの班の男子をかためる、すると今度は他の班の男子がばらばらになってしまう。だから全体を離すことにしたのだ。

斎藤：その辺はどうすることもできないから。

司会：他に、「スタンプは人数がいるほうが盛り上がる」や、「1人の子に手がかかる」と他の子に手がまわらない」等の意見が出されています。

駒形：私の班は、高校生も大学生もついていた班なのだが、1人集中できない子がいて、すぐうろうろといなくなったりして、私はその子にふりまわされっぱなしだったので、班の子ども的人数がとても多く感じた。

相馬：これから学校に勤めればそういう子はたくさんいる。LDとか、ADHDとか、普通学級にいる、そういう子どもたちとどう関わっていくか、これは1つのテクニックなのだが、その子を利用して周りを感化させる。言い方は悪いかもしれないけど。

駒形：それはあった。最後のほうは、班のみんながその子のことを気にかけて、「どこ行った？」ってみんなで探して全員がまとまるっていうのがあって、結果的には良かったのかなと思った。

相馬：それでいいの。その子を題材にして他の子が、自主的に取り組めるような態勢をつくっていったら、自分の教育するものに持っていくと、それは良い効果だと思うよ。

駒形：でも初めは戸惑った。その子のことはなにもわからないし。

相馬：でも良い経験だ。附属で実習してもこういう子はいないから。みんな入学試験受

けて入ってくるからね。

駒形：私が附属に行ったとき、6年生を見たのだが、実習も6年目で、私達の世話を焼いてくれるのだ。いすを持ってきてくれたり、気をつかってくれるのに驚いた。

相馬：慣れているのだ。実習も何回も来るから。ただ気をつけなくてはいけないのは、それがその子の本当の姿かっていうことだ。でも、今回のように遊びを基本として寝食をともにすると、やはり、本当の姿というのが見えてくる。隠しているものが、ぼろぼろ見えてくる。そこをあなた方がどう見つけるかなのだ。

駒形：良い経験だった。

司会：次はスタッフミーティングについてですが、意見のある方はどうぞ。

鎌田：私たちは班つきだったのに、スタッフの意味がわからなかった。立場があいまいだったと思う。

弥延：初めて私達がミーティングに参加したときは、もうだいたいの活動の流れは決まっていたので、何をしたら良いのだろうという状態だった。それに学校の先生がいて、話してくれる人とか話しにくい人等様々で、大学生の自分達をどう思っているのかというのが気になった。

相馬：少年教育指導員というのは各中学校に1人、その他に専門員と言って民間にいる人がいて、私も本当は専門員でして、学校には私の他にも、もう1人きちんといふのだ。集まった先生方のなかには、学校で係として決められた人もいて、必ずしも希望して来ているというわけではないから、子ども会のために本気になって、「やってやる！」という人ばかりではなかったのは事実だ。だから、そういう先生は話にくかったのだと思う。

弥延：話しにくい先生ばかりだったら、この企画は中途半端なものに終わっていたと思う。でも違ったから良かった。

相馬：最初大学生がこれに参加するとき、何を期待するか、どう対応すればいいか話し合った。高校生リーダーは具体的に動いて、「こうやるんだよ。こうすればいいんだよ。」と子どもたちに直接はたらきかける役割を持つのに対し、大学生はテクニックがないから、それは無理だ。だから、子どもたちと一緒に動いて動きながら、一歩離れてグループを見てケアする、それが教育学部の学生ではないかなと。それで、班つきという形をとったのだ。これからいろいろな子どもたちと接するのだから、今の体験がいきってくるはずだ。そういう先生、仲間が増えてくれれば、県全体、国全体そういうテクニックを持った教師というのが増えるわけだ。こういう体験のない先生ばかりなんだ、だから、こうやって、何人かずつでも増えていってくればということだったのですよ。でも、ただ単位を取りに来た人もいるのかな？という話もあった。

弥延：いや、それはないです。やる気のある人だけが残ったので。

相馬：君達はスタッフと言えどスタッフなのだ。私達みたいになれば、遠巻きに黙って見ている。わかるよね？子どもたちに何かを教えたいときは、ポンとやって、ポンと離れなければだめなのだ。私達から見れば、その子どもたちがあなた達だった。高校生スタッフよりも年上だし、だからちょっと、一歩離れて見てほしかった。

司会：夜のミーティングに関してはどうだった？

弥延：私は、大学生とスタッフだけのミーティングよりも、高校生が入ったほうが、おもしろかった。いろんな意見が入ってきて、視点がそれぞれ違ってはっとさせられる、そういうことがあって、楽しかったのだと思う。

駒形：スタッフミーティングよりは、高校生と踊りを練習していたほうが良かった気がする。はっきり言えば、スタッフが集まっていたのは、本当に意味がわからなくて、なぜこんなことをするのだろう？と思っていた。最後踊りを練習しているときに思ったのだが、具体的

にどんなことをするのかということ私達はわからなかったわけだから、踊りとか、キャンプファイヤーとか、そういうことをもっとできたら良かったなと思った。

佐生：あと、中学校班の方に友達がいるのだが・・・

鎌田：小学生の方がすごくうらやましいって言っていました。

相馬：正直な話、君達が参加するという話は、本当に突然だったから、「えー！じゃあどうしよう。」という感じで、それにフレンドシップ事業というものも全然わからなかったし。でも、「子どもと触れ合う」ということが目的だとするのなら、これは班つきにしようと思ったのだ。君達やる側にしてみれば、やはりフレンドシップ事業で、こういうふれあい自然体験活動の一環としてくるわけだから、それに沿った活動をさせなくてはいけない、そしたらやはり、子どもたちと常に一緒にいる班つきが、一番ベターなポジションかなと思ったんだ。それで班つきリーダーにした。

司会：その点に関しては、みんな班つきでよかったと思っているよね。

鎌田：だからその分中学校の方が気になって。私が見ているときは、みんなばたばたと走っていて、準備に忙しそうで、同様に私達がもし班つきでなかったらどうなってたんだろうか？と思った。

相馬：班つきでなかったら、わけがわからなくなっていたと思う。班つきだから、班に所属している何人かの子どもたちに焦点が絞れていた。そうでなければ、全体を常に見ていないといけないと思うがそれは無理だったと思う。

弥延：子どもたちともっと時間が持ちたかったっていう意見が出てますね。夜寝る前に一緒にいたかった。お風呂が恥ずかしかった。

駒形：発達の違いが。

弥延：男はおもしろかったですよ。布団のたたみ方がわからない子がいた。生活習慣の指導が必要です。

斎藤：生活習慣って何？

駒形：ベッドを出したり、忘れ物とかが小学生だなあっていう面が見られた。そういうところで班付き、一歩置いてケアする役目が出てきたんじゃないのかなって思った。ベッドなど高校生がいなくて手助けが大事だと思いました。

弥延：どこまでやらせてどこから手を出すかだよ。それは難しくない。

相馬：それは教育のテクニックの究極だ。そうは簡単にはわからない。それがわかればもう大ベテランだよ。

弥延：布団のたたみ方とかは俺らもやり直しをくらったし、班の子たちにちゃんとたたんでこいとかいったくせに、自分がダメだったので、面目丸つぶれで。

相馬：いいんだ。

弥延：まあそれはそれでおもしろかったですけどね。

相馬：そういうところも見せない。寝る前に一緒にいたかったっていうのは子どもたちにとっても意味があるけれど、子どもたちの秘密のお話とか情報交換もある。適当なときに引きあげないと。

駒形：でもお風呂からあがったらすぐに班長会議とかやってミーティングとかでて、寝るまでの時間一緒にいれなくて、「もう会議だから」と言っていると「えっ、もういくの」といわれてさびしいと思いました。

弥延：風呂や班会議だったりしてちょっとだけいて、あと部屋にいるのが班の子だけではなかったから、部屋に行って話したとしても、共通の話題になるとまわりの子はわからないから難しかった。同じ班でいるっていう意味は結構あったと思うんだけど。

駒形：でも班に固執しなくても、ほかの班の子でも先生とかっていつてきたりして、それで触れ合えるっていうのはいいなと思った。

弥延：みんな先生だったよね。俺は先生じゃなくてひろしだった。まあいいんだけど、なんでなんだろう。

斎藤：仲間、仲間。

相馬：私なんかせつろうだったし、3年の学年主任なんだよ。そんなもんだ。

弥延：もう1年やることはできないんでしょうか？

相馬：それは私たちのほうではいけないな、学務のほうで。

弥延：また来年も今の一年生が行くと、たぶん同じことの繰り返しだけ続いていくと思う。せっかく一度やったのだから、ある程度わかってきた部分もあるし、もっとやりたい、こうしたいっていうのがあるのだから、来年もやっていきたい。

鎌田：ボランティアとかはできないんですか？

相馬：保険をかけないといけないんだ。学校はそういう面で保証はあるけれども、なんかあるときが問題なのだ。子ども会にはいってあげれば子ども会で保険はかけているし。来年も来たいなら来たほうがいいよ。子ども会に関わってみるとか、やってみてはどうですか。

斎藤：チーフとしては君たちをもう一回使いたい。ちょっとだけど、やっとなんか君たちがどういう子たちなのかわかってきたし、もったいない。

弥延：使われたいです。

相馬：活動は子ども会研修会だけじゃないんです。11月3日の子どもの祭典に来てみればいい。

弥延：他の活動は子ども会全体の活動になるんですか？

斎藤：大きいイベントとしては、明日の子どもの祭典とゴールデンウィークの子どもの集いをやっている。ボーイスカウトやガールスカウトと一緒になにかやっている。あとは子ども会連合会の独自の事業としては研修会に参加してくれそうな子や、参加してくれる子を集めて、中学生のリーダーを養おうっていうリーダー集会などをやっている。

相馬：各地区の子ども会のキャンプとかにも招かれるし、学校でも一泊研修に呼ばれて遊びなんかを教えたりもする。

弥延：そういうものの中に何か学生のボランティアなどないですか？

相馬：行きたい時間かできる人であれば、中央公民館でみんなやっているから聞いてみて。一番いいのは佐々木さんかな。「何かないですか？」って情報集めてみて。

斎藤：先手必勝で、君たちのグループでサークルになったら。

相馬：そうだ、非常勤のサークルになってあるときだけ集まる。

斎藤：お手伝いしますって。

弥延：みんなこういう子ども会に参加したのって初めてだと思うので、少しずつ仕組みとかやり方がわかってきたし、わかろうとしていたときだったのに、せっかくだから続けたいですね。

斎藤：個人的に言わせてもらえば、君たちが子ども会のために何とかしなきゃいけないっていうのはいらないと思う。だって君たちはこれから先生になっていこうとしているわけでしょ。だから、そのための手段として子ども会っていう子どもたちと触れあう場に行って、子どもたちと触れあってみようでいいと思うんだ。

相馬：子ども会にはいると後で苦しくなる。やらなきゃならないとか、後で疑問になってくる。

斎藤：結局君たちは先生を目指しているわけだから、君たちのためにやらなきゃダメだと思う。

相馬：それでもやりたいのならば入れればいいし。学級を持てば必ずゲームとかをやる必要とかあるし、人の集め方、どうすればいいか、そういうのがわからない人がいっぱいいるんだ。そういうのを見て大いに利用してくれれば。

司会：そろそろ一人一人の今日のこの分科会をやってみての感想を話してもらって、最

後に先生方から講評をいただく感じでいいですか？

佐藤：活動しているときはわからなかったことを話し合ってみると、あらたにわかることがあり、あの時こうすればよかったなと思っていたことで、いろいろ自分でも反省しているところがあるんですけど、いい思い出じゃなかったのかなとおもいます。

中野：私はこの活動に参加して、普段の学校での生活でなくて、遊びを通しての子ども達との接し方、子どもたちの本当の姿が少し見れた気がして、すごいよい機会だったと思いました。最初は先生方や高校生の方との関係が密じゃなくて不安だった部分もあったんですけど、日をおうごとにみんなの関係がうまくいって、最終的にはいい終わり方ができたのじゃないかってきがします。こうやって改めて振り返ってみて思うことができたんですけど、もっと早い時期からこういう話ができたらもっと盛り上がったのじゃないかと。9班について感じたことなのですが、一緒にいて楽しんで動くことはできたんですけど、一歩はなれてケアをするというのがけじめを持ってやるのが足りなかったという反省がありますが、楽しくやれてよかったと思います。

駒形：あっという間に日がたって、ビデオを見て班の子をすごく懐かしく、自分にとってもいい思い出になったし、教師になりたいという気持ちがあるのですごく役に立ったと思います。なので、また来年こういうことがもっと上手にできたらいいと思います。

宮木：この活動のまえに大学生同士で話すことも少なかったし、まして先生方とも話すなんて事なんてなかったので、こういうときどう考えていたかとかわかってよかったです。

藤田：岩手山にあって3ヶ月くらいたっただいぶ記憶も飛んできたんですけど、始めにビデオを見てあの頃を懐かしく思って、本当に岩手山の体験活動に参加してよかったと思います。今日こうやって討論してみて、自分の意見と違う他の人の意見を聞いてとても勉強になったと思います。

松山：私がこのフレンドシップ事業に参加したのは、先生になりたいと思って教育学部に入って勉強していくうちに自分は先生に向いてないというか、人を集めたり惹きつけたりする力が無いなっておもって。でも先生になりたいからいろんなことに参加して、自分に自信が持てればいくなって参加したんです。そしたら本当によく、今までボランティアに参加したいと思っていたけど一歩踏み込めなくて。でも、今日の討論会で先生の話聞いて、子どもたちと触れ合うのはどうしたらいいのか、ボランティアにはどういう活動があってどう申し込めばいいのかわかりました。

佐生：私はこんな風に活動するのはじめてで、子どもたちとどうやって触れ合ったらいいのか、どうやったらうまくできるのかと始めはどきどきしていたんですけど、今回わかったことは自分を飾るのではなく出さないと、子どもたちは寄ってこないことがわかりました。あと、附属小に行ったときに、私の班の子と会ったんですけど、「夏休み面白かった？」って話したら、「子ども会すごく楽しかった」って言うてくれて、子どもたちの心にもスゴク残っているんだっていうのが感じ取れて、もし来年機会があったらぜひやりたいなと思いました。ありがとうございます。

鎌田：私が受け持った7班はバラバラで、はじめていた子もいたし、過去にいじめを受けていた子、静かな子もいて、一つの行事に持っていくっていうのが大変だったんだけど、先生になればこういうのが普通にあるんだなって思って、いい勉強になりました。附属小に実習しに行ったときに、研修会に参加した子にどこかで見たことがあるっていうのを言われて、ああちょっとは記憶にあってうれしいなと思っていました。これからそういう機会があれば参加して、子どもたちとふれあいたい

です。

弥延：今日はたくさんの意見を出してもらってどうもありがとうございました。先生やチーフの話が聞けたということで感謝しています。今まで自分の中で抱え込んでいた、本部やスタッフの人たちが自分たちをどう思っていたのかと悩んだりしたこともあったし、それですごく有意義な時間が過ごせたと思います。この活動に参加しようと思ったのは、今まで自分が地元でボランティアのスタッフとしてやっていて、そこから学んで実際に青森で教員採用試験を受けたいと思っていました。青森の子とたくさん触れあう場が欲しいと思って、この活動があるって聞いたときに、参加することをすぐに決めました。小学校の高学年の子との宿泊研修は初めての経験でした。子どもたちといい関係を作ることができて、最後のわかれとかすごく別れるのがつらくて目に涙ためちゃったりしました。子どもの目線に立ったり、教師の目線で見たりといろいろな目線で子どものことを見てとらえることができたのですごくよかったです。先生方といろいろ話せたというのは初めてだったので貴重な時間だった。また機会があれば参加したいです。せっかくこういう活動ができたので、来年また班の子どもたちに会いたいと思います。どうもありがとうございました。

相馬：今の子どもたちは実体験が少ないっていうこと、それはわかってほしい。テレビとか本とかで疑似体験をするかわりに、子ども会では、実際に体を動かしたり、汗をかいてりさせている。子ども会という集団の中で体験することは、人と人との関係がわかる上でも大切なことだと思う。私は今年の春まで社会教育主事という仕事をしていました。外から学校を見て援助するとか、学校を離れて子どもたちを集めて体験させるという仕事をしていた。それをやりながらやっぱり体験が必要だなってつくづく思った。3年間やって今年は学校の中からやっているけれども、中からってというのはどうしてもつまる。だから、あなた方が学校に勤めるようになっていろいろ壁にぶち当たるときにどういうことを考えるのか。いろんな人と付き合うことが大事です。子ども会の活動のスタッフの中には教師でない人がいる。そういう人たちからも学ぶ事です。この今の環境は周りが教師だらけなので、それだけだと絶対に詰まる。子ども会のリーダー研に参加することの意味は、違う方向からアドバイスを受けたり、違う方向から見てみるができることだ。あと、接し方が下手ってというのは時とともに改善されるので、石にかじりついてでも採用試験受けて合格してください。あせらないで、今みたいに飛び込んでいろんな活動をしてみて下さい。

斎藤：いまの話をもっと簡単にしゃべるわけではないんだけど、信じられないと思うけど、俺はすごく恥ずかしがり屋です。小6までは人前で歌う、とてできなかった。どこで変わったかは自分でもわからないけれども、中2のときに中学校の研修会に参加したのが、多分ひとつのきっかけだなとは感じているけれども、何でこんな自分になったのかはわからない。前にもしゃべったけれども我々スタッフ、少年教育指導員のなかで俺だけ教師ではなく一般サラリーマン。相馬先生のように教師の目を持っていて、なおこういう活動ができる人は、君たちにすごくいいアドバイスをくれる。適切なアドバイスができると思う。俺はそういう目を持ってないからできない、教師という目は持ってないから。

相馬：それがかえっていいんだ。

斎藤：いまは教師と生徒、指導員と大学生っていう立場はあるけれど、考えてみれば人間対人間なんだよ。だから俺がたった一つだけ言えることがあるんだけど、「常に笑顔を絶やさないやつには絶対人はついてくる」人はくる、集まってくる。だから、人として人間としてっていうのは忘れちゃいけない。授業だけでなく人間と人間として皆付き合っていくんだし、会っていくんだし、来年も一緒にやりたいねっていうかやりましょう。

弥延：ほんとうに今日はどうもありがとうございました。

斎藤：いえいえ。こちらこそありがとうございました